

## 聴覚特別支援学校における作文指導

### —主述関係に注目して—

田中 優子

本稿は、昨年に引き続き、本校高等部における作文指導の試みを報告するものである。昨年は理由の表現について、生徒の誤用を減らすとともに、表現の多様性に気付かせることで、表現の選択肢を増やす試みについて報告したが、今回は同じ専攻科のクラスにおける作文指導の中で行った主述関係の誤用を減らす取り組みと、その後普通科の他のクラスで行った実践の一つを報告する。

キー・ワード：作文指導 高等部 主述関係 誤用

### 1 はじめに

聴覚に障害がある児童・生徒のハンディを補うために、聾教育においては作文指導には力を入れており、初等教育の段階から、基本的な語彙や構文を習得させるために各校で繰り返し丁寧な指導が行われている。作文の指導には小学部、中学部、高等部それぞれに力を入れるが、生徒の成長や思考力の充実度によって、その指導の目的は異なる。高等部の生徒は小学部の児童に比べると複雑な構造の文を理解する力があることは澤(2001)でも検証されている。また、高校の学習指導要領には次のようにあり、国語科の目標の一つとして、言語感覚を「磨く」とあるが、言語感覚については、小学校では「養う」、中学校では「豊かにする」としていたものを、高等学校では「磨く」となっており、高等学校ではより充実した言語感覚を引き出すことが求められていることがわかる。

国語を適切に表現し的確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力を伸ばし、心情を豊かにし、言語感覚を磨き、言語文化に対する関心を深め、国語を尊重してその向上を図る態度を育てる。

(「国語科の目標」より)

法改正以降、障害者の大学進学率も社会進出も一層増えつつあり、「最低限これだけでできればいい」という教育ではなく、「よりレベルを高めるためにはどうすればいいか」を考える教育が求められる時代で

ある。生徒の言語力をより豊かにするためにどうすればいいかを念頭に置き、作文指導の方法について考えたい。

### 2 研究の目的

聴覚に障害のある児童・生徒は耳から入ってくる情報が健聴者に比べて不足している。そのハンデを補うために、特定の文型を覚えさせ、正しく使うことができるようにするのは非常に大切だということは先行研究からも明らかである(佐坂 2014, 谷口 2013)。高等部においては、更に語彙や文型を増やす努力は勿論必要だが、一方でそれまでに学んできたことをベースとして、相手や場面を意識しつつ、既習の語彙や文型をどう使うか、どう広げていくかということを考えた指導が必要と考える。今回は、生徒の表現力の多様性を引き出す試みの一つとして、作文における主述関係の指導を授業でどう扱うか考えたい。主述関係は本研究で扱うデータ分析の結果、誤用が多く見られたものの一つである。更に、その成果を踏まえて他のクラスで行った作文指導の一部についても報告する。

### 3 研究方法

最初に、本校の高等部専攻科で2014年4月から一年間の授業の中で行ってきた作文指導の内容の一部を基に考察する。授業の受講者には月に一回程度、百～二百字の「ミニ作文」を書かせ、全員のミニ作

文をワープロで打ち直したものを配布し、フィードバックを全員に対して行うということを継続的に行った。その過程で生徒の誤用分析を行い、指導に反映させてきた。このクラスの作文データを全て文毎にデータとして整理し、誤用は分類した。それらをデータベース化し、分析資料とした。その結果、誤用で特に多かったのは理由の表現と、文のねじれ関係であった。また、助詞の間違いも多かった。この傾向は、データベース化して分析するまでもなく、日頃から感じていたことではあったので、授業でも特に力を入れて対策を考えてきたところである。誤用の傾向としては、決まりきった構文のパターンを使おうとして失敗するというものが目立った。日本語には同じことを表現するにも、様々なバリエーションが考えられる。筆者は聾学校に勤務する以前は普通校で勤務していたが、健聴の生徒と比べると、母語話者の場合は幾通りも広がっていくその選択肢の多様さが聾学校の生徒にはあまり見られないのではないかと感じた。そこで本報告以前に拙稿(2016)で理由の表現の指導方法について提案した。今回は理由の表現と同様に誤用が多く見られた主述関係の誤用についての分析と、その対策方法について報告する。

#### 4 授業内容

##### (1) 誤用分析

生徒達の誤用の中で、拙稿(2016)で扱った理由の表現と同様に誤用が多かったのは主述関係の誤用である。文の柱となる主語と述語の組み合わせが不適切な「文のねじれ」の現象が多く見られるのは、主語が人ではなく、なおかつ、その内容を説明しなければならない場合であることが、生徒達の誤用例を集めていく中で明らかになってきた。

例1：好きなことはダンスをするのが好きです。

(生徒1)

例2：私の将来の夢は事務の仕事です。(生徒1)

例3：将来の夢は事務に関する会社です。

(生徒2)

例4：この学校の長所は勉強と人間関係です。

(生徒3)

例5：この学校の長所は、設備の充実や就職の為に様々な資格を多く取れる学校です。

(生徒4)

例1～例5の主語は「Aは学生である」のようにA＝学生となる場合と異なり、「Aは～ということである」とそれぞれその内容を説明しなければならないものである。例1の場合は「好きなことは」という主語には「ダンスをすることです」という述語が対応する。「～は～ことです」という構文を正しく使わなければならない分、生徒達にとっては難易度が高くなる。しかし、「私はダンスが好きです」のように、主語を一人称にすれば同じ内容を簡単に表現することができる。実際、「好きなこと」について書け、という作文課題に対して、6人中5人が次のように一人称を主語にして書いていた。

例6：僕は絵を描くことが好きです。(生徒2)

例7：私はカレーライス、カレーナンが好きです。

(生徒3)

例8：私は「アニメ映画」を見る事が好きです。

(生徒5)

例9：私は、ショッピングすることが好きです。

(生徒6)

例10：私は、犬と一緒に遊ぶことが好きです。

(生徒4)

「好きなこと」というテーマに対して、そのまま「好きなことは」と書き出すのはもちろん一つの方法であり、「好きなこと」を取り立てて強調する効果のある書き出しではあるが、「私は～が好きです」という形の方が自然に書け、間違うリスクも少ないという考え方も生徒達には紹介した。例8や例9は例10と違って、目的語から動詞を除いても意味が通じるので、「～ことが好きです」という形ではなく、「アニメ映画が好きです」「ショッピングが好きです」とすれば、もっとすっきりし、簡単にもなる。これがもし、「好きなことと嫌いなこと」について書け、という課題であれば、「好きなことは～ことです」「嫌いなことは～ことです」と、それぞれについて強調する形で書くのは効果的である。このよ

うに、何について書くかによって、書き方を選ぶことも考えさせたい。

例2と例3は、「将来の夢について書け」という課題だった。6人中5人が「(私の) 将来の夢は」という書き出しであった。残りの1人は「私は大きな作品を制作することです」という破格な文だったが、これは「私の夢は」等と書き出すべきところである。いずれにしても、「将来の夢は～ことです」という形にしようという傾向が顕著である。6人中3人は主語と述語が合わない、いわゆる「文のねじれ」を伴う文であった。例4と例5は「この学校の長所と短所について書け」という課題であったが、6人全員が「(この学校の) 長所／短所は」という書き出しで、うち4人に「文のねじれ」が見られ、1人は複数の長所を挙げるに際して適切につなげられていないという誤用が見られた。全体に「～は～ことです」という形にしようとして失敗する傾向がある。これは「好きなこと」について6人中5人が一人称を主語にして書いていたのと逆の傾向である。その原因は、「好きなこと」のように「活用語＋こと」の形の名詞は「(私が) 好きなことは～です」は「私は～が好きです」と、そのまま「好きだ」という形容動詞を一人称主語の述語として使えるが、あとの二例に関しては、「将来の夢」も「(この学校の) 長所と短所」もどちらも普通名詞であるため、「私は～ことが将来の夢です」のように、「～こと」という形を使わなければ、そのまま述語に直すことができないからだと考えられる。この形だと却って複雑になってしまう。しかし、それも工夫次第である。「将来の夢」については、「私は将来～たいです」という平易な形を用いることもできる。作文のタイトルも含めて一つの作品なので、タイトルに「夢」という言葉が入っていれば、その語を繰り返さなくても、問題ない。それでも気になるならば、文章の結びにでも「夢に向かって頑張ります」などと書いてもよい。日本語には様々な書き方、表現の仕方があるのだということを知ること、書き方の幅も広がり、間違いを回避することもできる。「この学校の長所と短所」についても、例5であれば主

語から「長所」という語を除いてしまい、「この学校は」にして、次のように書くことができる。

例5'：この学校は設備が充実しているし、就職の為に様々な資格が取れる学校です。

「長所」という言葉を書かなくても、内容から長所について述べていることは明らかであるため、それで問題はない。「長所」という言葉を残したければ、次のように書くこともできる。

例5''：この学校には幾つかの長所があります。  
設備が充実しているし、就職の為に様々な資格が取れます。

「この学校の長所は」のように、「～の～は」という形の主語は述語の形も「～ことです」としなければならないが、「この学校は」のような「～は」の形の主語は述語の形も様々なものが考えられ、表現の選択肢が広がる。「～は～ことです」という形を正しく使えるようにすることは勿論、必要なことであるが、その形ばかりを使うのではなく、もっと表現のバリエーションを増やし、柔軟に文章を書く力を養いたい。

## (2) 実践1

このような主語の選定の選択肢を増やす力をつけるためには、文の構造を理解することが必要である。また、いくら繰り返し「～は～ことです」と教えても、その形を作るときに間違えてしまう生徒はいる。そういう生徒には文の構造を教えることで、もっと柔軟に他の形で文を書くことができるような視点をもたせたい。また、そうやって文の構造を知れば結果として、どういう場合に「～は～ことです」という形を使わなければならないかもわかってくるのではないかと考えられる。そこで、次のような練習を行った。

(練習1) 新しいエアコンが発売された。値段は58000円だ。従来のものの二分の一の電気代で済むため、爆発的に売れている。

★「このエアコンの特徴は」「このエアコンの値段は」「このエアコンは」で始まる文を作ってください。

- a. このエアコンの特徴は従来のものの二分の一の電気代で済むことである。
- b. このエアコンの値段は58000円である。
- c. このエアコンは58000円である。
- d. このエアコンは従来のものの二分の一の電気代で済む。
- e. このエアコンは爆発的に売れている。
- f. このエアコンは従来のものの二分の一の電気代で済むため、爆発的に売れている。
- g. このエアコンは58000円で、従来のものの二分の一の電気代で済むため、爆発的に売られている。
- h. このエアコンの値段は58000円で、従来のものの二分の一の電気代で済むため、爆発的に売られている。

以上のような練習を繰り返していく過程で、生徒達が主語と述語の関係を構造的に理解していく様子がわかった。次に一通りの練習と説明が終わってから、生徒達が作った文を紹介する。

(練習2) 練習1でやったように、次の文章から、主語を変えた文をいくつか作ってみましょう。

きらきら市は、人口が13000人です。高齢者が多いので、高齢者が暮らしやすい町づくりをしています。建物はすべてバリアフリーで、高齢者に優しい設計です。また、若者と高齢者の交流の場もたくさんあります。

これらの情報から生徒達が作った文の一部を次に挙げる。

例11：この市の長所は建物はすべてバリアフリー

ーで、高齢者に優しい設計であることです。(生徒2)

例12：この市の建物はすべてバリアフリーで、高齢者に優しい設計です。(複数の生徒)

例13：この市の建物はすべてバリアフリーで、高齢者に優しい設計で、またこの市には若者と高齢者の交流の場もたくさんあります。(生徒5)

例13の文はくどいということで、全員で相談して次のように直した。

例13'：この市は高齢者に優しい町です。建物はすべてバリアフリーで、また、若者と高齢者の交流の場もたくさんあります。

例13''：この市の長所は建物がすべてバリアフリーで、高齢者に優しい設計であることと若者と高齢者の交流の場がたくさんあることです。

教員が生徒5の文をもっと洗練された形に直そうと提案したところ、生徒5自身がまず二つの案を出し、下線部はそれぞれ別の生徒が提案して形を変えた。例13'は「～は～ことです」という構文を使わない形で、例13''は使った形である。生徒5は教員の説明の主旨を理解して、両方の形を提示した。板書しながらそれぞれの生徒の文や誤用も共有していく練習の中で、良い流れができたと感じている。

また、元の文章では「設計です」となっているが、生徒2は文の述語を例11のように「設計であることです」と、正しく直すことができた。これは例3からもわかるように、今までは生徒2は間違っていたところだったが、いろいろな形に直す練習をする中で自然に直すことができたのだとしたら一つの成果ではある。これ以前には生徒2は次のような文を書いていたことから生徒2の進歩が見て取れる。

例14：まず、学校の長所は皆と楽しくお話しているです。または、得意な科目だけ一生懸命頑張れるです。そして、学校の短所はなしです。(生徒2)

このように、ある情報を表現する形は一つではな



く、様々な形があることに気付かせることで、生徒達の表現の幅が広がっていくだけではなく、基礎的な力も充実していくのではないかと考えられる。この方法は一定の成果があったと思われたため、他のクラスでも同じ練習を行った。

### (3) 実践 2

上記の練習方法に成果が見られたことを受け、その後の授業においてもこの方法の実践を適宜行った。直近の実践例は 2016 年 6 月に行った普通科 3 年生のクラスでの作文指導である。普通科では習熟度別に教科のクラスを編成しており、当該クラスは 3 つあるうちの下位のクラスであり、時には下の例のような誤用も見られる。しかし、全体としては専攻科の生徒と比べると書く力は上である。そのため、上記の基本の練習に加えて、与えられた情報全てを使って一文にまとめるという応用の練習も行った。

例 15：人間は、相手の事を考えて心がけているので、親切な心温かい気持ちを少しでもあると私は思う。(生徒 7)

例 16：多くの人がカフェテリア方式の方が好きという人が多かったです。(生徒 8)

このような誤用は、普段なんとなく書き始め、主述関係や修飾・被修飾の関係をあまり深く考えずに文を作ってしまうために起きるのではないかと考えた。例 15 の場合は「人間は」→「考えて」という主述関係があり、更に「人間は」→「心がけている」という主述関係があるが、「何を」→「心がけている」という修飾・被修飾の関係が成り立たず、目的語がない状態である。また、「気持ち」→「ある」という主述関係も把握できていないために「気持ちを」という助詞の誤用が起きていると考えられる。そこで、文の構造をしっかりと理解するためには実践 1 の練習が有効と考えた。同時に日本語には様々な文の書き方があることにも気付かせ、生徒の表現力を充実させることも期待できると考えた。そこで、実践 1 の練習 1 を行い、「このエアコンの

特徴は」よりも「このエアコンは」を主語とした場合の方がいろいろな述語と組み合わせることができ、その結果、様々な文を作ることができるということに気付かせた。「～の～は」という形の主語の場合は、それだけ制約が多くなり、述語の形も「～ことである」など、決まったものになる。その形を正しく使えるようにするとともに、それ以外の形でも同じ内容の文が何通りも書けることを練習を通して改めて認識させた。また、文の中心となる主述関係をしっかり押さえておけば、あとはそれ以外の情報を修飾部として補足していけばよいことを説明し、文の構造に注目させた。次に応用として、与えられた情報全てを一文にまとめる練習をさせたところ、生徒 7 と生徒 8 は次のような文を作った。

例 17：58000 円であり、従来のものの二分の一の電気代で済む新しいエアコンが発売された。(生徒 7)

例 18：大人気の新発売のエアコンは手頃な値段で従来のものの二分の一の電気代で済むのが特徴である。(生徒 8)

例 17 は「爆発的に売れている」という要素が欠けているが、文法的には誤りのない文が書けている。例 18 の場合は「大人気」という言葉で「爆発的に売れている」というニュアンスを出そうという工夫が見られる。上手なまとめ方である。生徒 7 の文は修飾部が長く、バランスが良くないが、それも他の例と比べることでスムーズに理解させることができた。

次に、今度は述語を決め、何通りかの述語に対応する文を書かせる練習を同様に行った。その後、理解の定着度を見るために、次の練習を行った。

(練習 3) 私は、4 月から市川学園に通っている。学校の生徒数は 500 人である。設備が新しく、Wi-Fi 環境が整っているので、とても人気がある。

- ① 主語を自分で考えて、いくつか文を作れ。
- ② 3 つの文を 1 つにまとめて書け。

①について、生徒7は次のような文を作った。

例 19：市川学園に通っている生徒数は500人である。

例 20：市川学園は、設備が新しく、Wi-Fi 環境が整っているので、とても人気がある。

例 21：私は4月から設備が新しく、Wi-Fi 環境が整っている市川学園に通っている。

例 22：私が4月から通っている市川学園は、設備が新しく、Wi-Fi 環境が整っているので、とても人気がある。

例 23：市川学園の設備は新しく、Wi-Fi 環境が整っている。

また、②については次の文を作った。

例 24：私が4月から通っている市川学園は、生徒数が500人であり、設備が新しく、Wi-Fi 環境が整っており、とても人気がある。

また、生徒9はもともと文法的な誤用の少ない生徒だが、次のように整理して文を作っていた。

- ・私は、4月から市川学園に通っている。…A
- ・学校の生徒数は500人である。…B
- ・設備が新しく、Wi-Fi 環境が整っているので、とても人気がある。…C

→①の答え

例 24：私は4月から500人もの生徒が在籍する市川学園に通っている。…A+B

例 25：私が通っている市川学園の生徒数は500人である。…A+B

例 26：私が4月から通っている市川学園は、設備が新しく、Wi-Fi 環境が整っているので、とても人気がある。…A+C

例 27：500人もの生徒がいる市川学園は、設備が新しく、Wi-Fi 環境が整っているので、とても人気がある。…B+C

→②の答え

例 28：私が4月から通っていて、500人もの生徒が在籍している市川学園は、設備が新しく、Wi-Fi 環境が整っているので、とても人気がある。

生徒7は、今までは比較的文法的な誤用が多く見られたが、この課題については文法的には全て正しい文を書くことができた。本人も、文の構造や主述関係に気を付けて文を書いたらうまく書けたという手ごたえがあったようである。また、生徒9は自分で文の構造を整理することで、より理解を深めた様子が見られた。②の文は主語の「市川学園は」の修飾部が長いと指摘したところ、修飾部を短くし、次のように直すことができた。

例 28'：私が4月から通っている市川学園は、500人もの生徒が在籍しているが、設備が新しく、Wi-Fi 環境が整っているので、とても人気がある。

以上のように、主述関係を中心に文の構造に注目させることで、日本語には幾通りもの表現のバリエーションがあることに気付かせ、同時に文法的な誤用を減らすことができた。主述関係を明確に意識することで、助詞の間違いも減ったと思われる。この方法は他にも動詞と目的語の組み合わせの誤用などにも応用できると考えられるため、今後更に練習の方法について考察と実践を積み重ねていきたい。

## 5 おわりに

聾学校の児童・生徒は耳から入ってくる情報が健聴者に比べて不足しているというハンデを補うために、特定の構文を正しく使うことができるようにするのは非常に大切なことであり、特に初等・中等教育においては、正しい形をインプットしていく作業は欠かせないものである。しかし、日本語の多様な表現の可能性を理解し、表現の幅を広げていくこともまた母語話者に求められることである。高等部以上で、ある程度思考力が成熟してきている生徒達にはそのような力を養うことも視野に入れた指導を引き続き考えていきたい。

## 【参考文献】

澤隆史・勝又直(2001)

## 120 聴覚特別支援学校における作文指導

聴覚障害児の作文における文の統語的・意味的特徴—聾学校児童と生徒の比較から—.東京学芸大学紀要 I 部門,52,177-183.

文部科学省

高等学校学習指導要領解説

佐坂佳晃(2014)

言語発達に遅れが見られる児童に対する指導—小学部高学年 E 児への指導の実践から—.筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要,36,26-29.

谷口洋子(2013)

言葉の力を育てるために—小学部低学年における実践—.筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要,35,17-22.

田中優子(2016)

聴覚特別支援学校高等部における作文指導～理由の表現～.筑波大学附属聴覚特別支援学校紀要,38,92-96.